

下図の「A」= 一般的意図 = 「協力の原理」(グライス)にかなう意図 (p.92)

下図の「B」= 個別的意図 = 表現上で「実際に交わされる(※具体的な)意図」(p.92)、具体的に伝えたいこと。

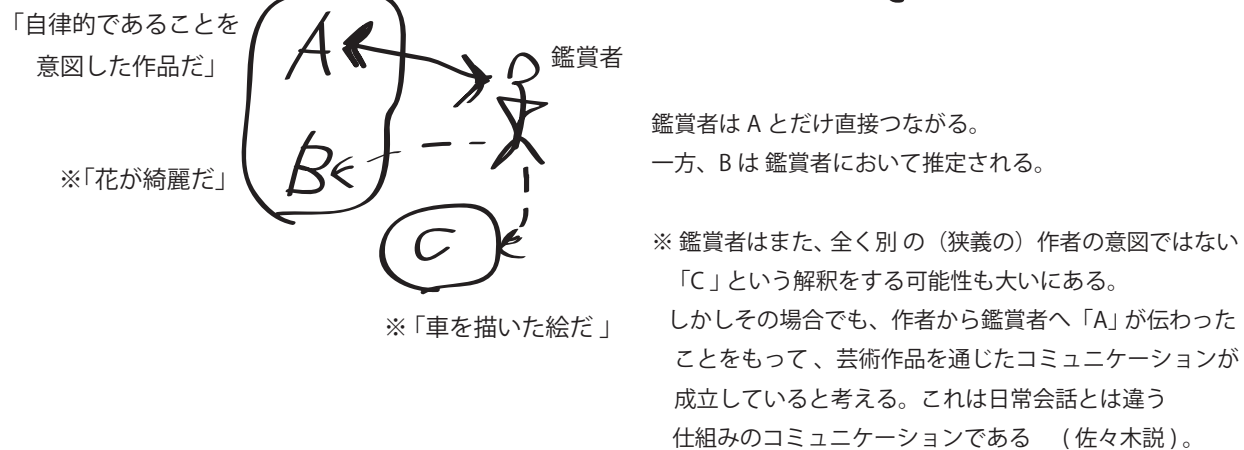
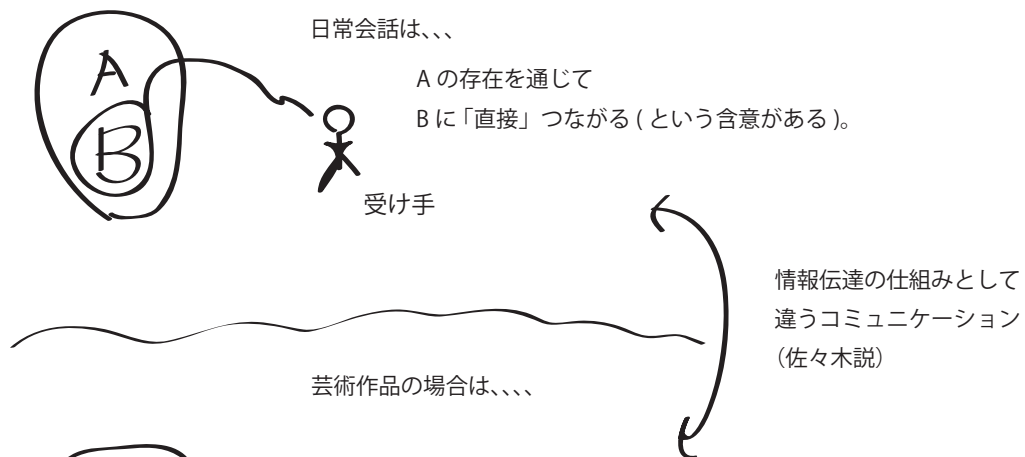
芸術作品の意味解釈で  
読者側の「読み」を  
重視する「新批評」  
(New Criticism)  
的な視点

「日常会話」と「芸術作品」のコミュニケーションの仕組みは  
「違うもの」 佐々木健一 説 (pp.92-93)

「日常会話」と「芸術作品」のコミュニケーションの仕組みは  
「同じもの」 渡辺裕 説 (第4章前半の論旨)

芸術作品の意味解釈で  
「作者の意図」を  
(あえて現代でも)  
重視する視点

# 対立



日常会話でも 芸術作品の場合でも、...

訂正部分はこの辺り



2019-09-25 訂正版の意図  
石井の誤読について  
Bが優先的に存在することでAが存在するという読みが誤読であり、そんなことはどこにも書いていない。  
渡辺が言いたいのは、AとBは一体だということ。  
どちらかが欠けても、もう一方が存在しないということ。

「(芸術作品の場合) 了解されたものが発話者の個別的意図であると『信ずる』ということは、それが実際に発話者の意図であることをただちに保証するものではない。しかし、その点は日常言語の場合にも同じことであった。個別的意図が協力の原理に従って推定されているにすぎない以上、(芸術作品の場合でも、日常会話の場合でも共に)そこにはつねに誤解の可能性がつきまとうているのである」(pp.95-96)  
したがって、両者の仕組みが「異なる」という佐々木説には論証の弱さがある(渡辺説)。